2.各直轄事務所における分析結果の概要

ここでは, 概ね過去 5 年程度の間に報告された直轄砂防事務所等による流砂 観測の代表的な成果をレビューする。

2.1 六甲山地での観測事例

1) 概要

六甲山地においては、2003 年から住吉川においてハイドロフォン、土砂捕捉 ピット、濁度計、水位計を用いて流砂量観測が行われてきた。さらに、近年、 10 渓流を対象に出水時にバケツによる表面採水を行うなど多くの流砂水文観測 を行っている¹⁾。

2) 横断的な直接採水による浮遊砂観測

六甲山系の10渓流を対象に出水時にバケツによる表面採水が実施され,浮遊砂量が求められてきた。田村ら(2014b)はこのデータを分析し,浮遊砂量は流量の2乗に比例する関係があり,下流河川における観測結果と比べて同じ流量のとき1~3オーダー程度浮遊砂量が大きいことを示した(図2.1.1)²⁾。さらに,同じ六甲山地であっても,渓流によっては同じ流量のとき浮遊砂量が1オーダー程度異なることを示した(図2.1.1)²⁾。一方,1つの流域の出水による違いは比較的小さく,同じ流量のとき浮遊砂量の違いは1オーダー以下であった(図2.1.2)²⁾。



図 2.1.1 六甲山地における流量と浮遊土砂の関係²⁾ 図中の実線は水理公式集から引用



図 2.1.2 住吉川・芦屋川における流量と浮遊砂量の関係²⁾ 図中の実線は水理公式集から引用

3)年間の流出土砂量の推定

田村ら(2015a)は前項で示した流量と浮遊砂量の関係,またハイドロフォン による観測結果を基に流域からの年間の流出土砂量の推定を行った⁴⁾。その結果, 森林流域では浮遊砂量は10~60m³/km²/y,掃流砂量は10~30m³/km²/yと推計し た(表 2.1.1)³⁾。一方,裸地が広がる荒廃流域である白水谷流域では浮遊砂量は 約 2,200m³/km²/y,掃流砂量は約 8,700m³/km²/yと推計した。明治期には六甲山地 は現在の白水谷同様広い範囲ではげ山であったとされている。そこで,田村ら

(2015a)は、近年の白水谷における流砂量は明治期の六甲山の流砂量に近いと考えると、明治期の六甲山の年間の流砂量は現在に比べて大きな災害がない年では、年間あたり2オーダー程度大きいと考えた³⁾。

さらに、田村ら(2015a)は森林流域の1つである住吉川で1979年に実施された浮遊砂観測結果に基づき、当時の年間の浮遊砂量は今より約5倍大きい230m³/km²/yであったと推定した。

	流域		観測所 名	流域 面積	計測年 . 平均	比年間通過流砂量		
想定年代						浮遊砂量	掃流砂量	全流砂量
				(km ²)		$(m^3/km^2/y)$	$(m^3/km^2/y)$	$(m^3/km^2/y)$
明治期 (はげ山の 時代)	山間部	船坂川	白水谷	0.252	2013(H25)	3,230	4,369	7,599
					2014(H26)	1,091	13,012	14,103
					平均	2,161	8,690	10,851
S13年災時	六甲山系全域		-	_	平均	_	_	35,600
S36年災時	六甲山系全域		-	_	平均	_	_	2,200
S42年災時	六甲山系全域		-	_	平均	-	_	15,000
S54年当時	住吉川流域		-	_	平均	238	_	-
現在 (H25-H26)	山間部	住吉川	西滝ヶ谷	1.484	2012(H24)	46	10	57
					2013(H25)	5	18	23
					2014(H26)	8	_	_
					平均	30	20	49
	下流部	芦屋川	河原毛	6.895	2013(H25)	9	38	47
					2014(H26)	26	13	40
					平均	17	26	43
		住吉川 本流	大谷	7.440	2013(H25)	29	7	36
					2014(H26)	52	7	59
					平均	40	7	48
		住吉川 支流	安場	3.449	2013(H25)	21	16	36
					2014(H26)	20	17	37
					平均	20	16	37
		六甲川	大土	4.171	2013(H25)	22	7	29
					2014(H26)	23	14	37
					平均	23	10	33
		宇治川	宇治川	2.978	2013(H25)	55	11	66
					2014(H26)	56	12	69
					平均	56	12	67
			平均			31	15	46

表 2.1.1 六甲山系の比年間流砂量の推定結果 3)

4) 比較的規模の大きい出水時の浮遊砂特性

2014年8月の台風11号時には住吉川,六甲川の上流域で表層崩壊が発生した。 田村ら(2015b)は両河川の流量と浮遊砂量の関係が過去の別の出水と異なり, 住吉川では,ある流量から浮遊砂量が高くなり,六甲川では流量の2.6乗で比例 したことを示した(図2.1.3)⁴⁾。しかし,推定される崩壊発生時刻とほぼ同時な いしはそれ以前に住吉川では浮遊砂量の急増が観測されたことから,住吉川で の浮遊砂量の急増は上流域で発生した表層崩壊の影響ではなく,アーマコート の破壊,斜面からの地表面流の流入等による土砂流出の可能性が考えられると した⁴⁾。



図 2.1.3 住吉川・六甲川における規模の大きい出水時の流量と浮遊砂量の関係⁴⁾ 図中の実線は水理公式集からの引用

【参考文献】

- 1) 田村圭司・内田太郎・森東哲郎・日野健・小菅尉多・木下篤彦(2014a): 六甲山系にお ける水文・流砂観測,砂防学会誌,66(6),82-86.
- 2) 田村圭司・日野 健・内田太郎・水山高久・小杉賢一朗・小菅尉多・永田葉子(2014b): 六甲山系の浮遊砂の特徴,平成26年度砂防学会研究発表会概要集,A144-A145.
- 3) 田村圭司・久保正和・内田太郎・水山高久・小杉賢一朗・小菅尉多・永田葉子(2015a): 六甲山系の流砂観測と土砂流出の変遷,平成 27 年度砂防学会研究発表会概要集, B300-B301.
- 4) 田村圭司・久保正和・内田太郎・水山高久・小杉賢一朗・小菅尉多・永田葉子(2015b): 六甲山系における比較的大きな出水時の浮遊砂の特徴,平成 27 年度砂防学会研究発表 会概要集, B296-B297.